校長先生の初恋物語

第51話　ジャイアンが悪くない理由

「ジャイアンは悪くない。ジャイアンは悪くない・・・。」そうつぶやきながら、走っていきました。

マンモス小学校には、運動場とプールの間に、大きな松の木があります。その松の木のところに、ジャイアンはいました。ジャイアンは、松の木によりかかって、ぶそくっていました。とっくんは、ジャイアンに近づいていきました。ジャイアンは、こっちを向きました。

「なんだよ、とっくん。おまえも、みんなみたいに、投げられたいのか。」

とっくんはあわてて首をふりました。とっくんはなぜだか泣けてきてしまいました。

「なんだよ。なんでおまえが泣いてんだよ。」

その問いには答えず、とっくんはジャイアンに向かって言いました。

「ジャイアンは、悪くないよ。ジャイアンは、きのこ君を助けたんでしょ。ぼくは、きのこ君の後ろの席だったから、気づいたんだ。」

ジャイアンは、とっくんのその言葉を聞いて、大きくため息をつき、そのあとは、なにも言いませんでした。

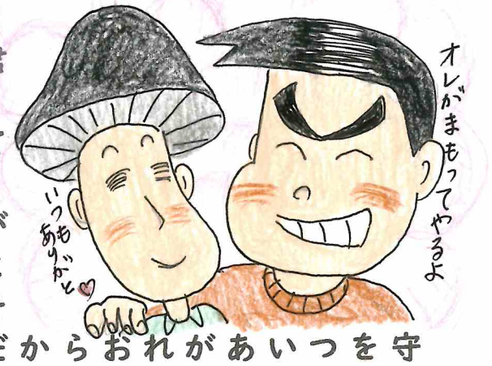
「ねえ、ジャイアン。本当のことを言おうよ。本当のこと言ったら、みんな分かってくれるよ。」

「だめだ。本当のこと言ったら、ぶっとばすぞ。いいんだよ、おれはどうせ、みんなのきらわれもので。」

ジャイアンの強い決意に、とっくんは何も言えなくなりました。そして、とっくんも、ジャイアンが悪くないという理由

を、だれにも言わないと、その時決めました。

きのこ君は、あの時、にょろひげ先生にほめられて、うれしかったんです。めったにほめられないきのこ君は、にょろひげ先生にほめられて、きんちょうしたんです。だからです。きんちょうして、おしっこをもらしてしまったんです。とっくんは後ろの席だから、きのこ君のズボンがおしっこでにじんでいくところを見ていました。ジャイアンも気づいたんです。ジャイアンはすぐに考えたんです。自分が守ろうと。



とっくんはジャイアンに言いました。

「もしかして、ジャイアンときのこ君は、本当は、仲良しなんでしょ。」

ジャイアンはうなずきました。そして言いました。

「おれたちは、みんなと保育園がちがうんだ。その保育園からずっときのこと友達さ。あいつ、気が弱いだろ。それだけじゃなくて、体も弱いんだ。だからおれがあいつを守るんだ。」

とっくんはようやく分かりました。いつものキャッチボールは、体をきたえようとしていたのか。給食を食べないきのこ君の口に、パンをおしこんでいたのは、栄養を取れってことか。とっくんはさらに、ずっと聞きたかったことを口にしました。

「ジャイアン、みんなからむしされるのって、つらくないの。どうしてみんなと仲良くしないの。」

ジャイアンは言いました。

「おれの親友はきのこだけだよ。」

ジャイアンがそう言うだろうと予想していました。「やっぱりな。」と思いました。

ジャイアンとは、その後教室で、話をすることはありませんでした。きっと、ジャイアンが、とっくんを心配していたんです。自分となかよくしてたら、ますますとっくんはみんなからきらわれると思ったんです。だからジャイアンは、とっくんが話しかけても、そっぽをむいていたんだと思います。

こうしてとっくんは、クラスのみんなから、きらわれるようになりました・・・。

つづく

次回予告　桜の花びらのすき間から